

説教「キリストを信じてこそ、キリスト教」

イザヤ書四二・一〜四

フィリピ 二・六〜一一

牧師 森田恭一郎

使徒信条をはじめ教会が告白していることは、父、子、聖霊の三位一体の神様を信じる信仰です。その信仰を日本の私たちが信じるために、最初に理解するべきこと、ヘール宣教師兄弟が日本に来て、まず宣べ伝えた信仰の内容は何であつたか。

『A・D・ヘールに学ぶ』によりまずと、最初に教えようとしたことは、唯一の真の神がいるということだつた。また、明治の時代、キリスト教の神様を日本の八百万の神様とは違うのだと真神(まことのかみ)の言い方を選んだ(六一、九七頁)ということでした。八百万の神々がひしめく日本の宗教文化の中で、天地の造り主であられる真の神様を宣べ伝えることは当然でした。日本のプロテスタント教会には、旧武士階級の人々が指導者になつたと言われたりするのですが、従来のお殿様に代わつてお仕えする方として唯一の神様に仕えるのだということが、案外ストンと腑に落ちる所があつたようです。

明治の時代とありますが、明治期の日本のキリスト教信仰は恐らく、父なる神様を真の神様として信じる所に、特色があつたと言えるでしょう。

けれども、キリスト教が真の神様を信じることにのみに留まっているならば、ユダヤ教と同じに、旧約聖書だけで事足りるということになりかねない。大雑把な捉え方になりますが、明治期は父な

る真の神様を告白し、大正期になって自覚され、実際には、信徒の皆さんにも身につくようになってきたのは昭和も戦後になってからです。

私たちの信仰はもちろん、父なる真の神様を信じるのですが、自覚したいことがあります。真の神様が何故、真であられるのか、ということですが、それは、父なる神がお遣わしなつた御子イエス・キリストのお姿を見て初めて分かることです。キリストを抜きにして父なる真の神を信じることはなりません。

初代教会から教会はキリスト教なのです。キリストに出会つたその所に「私の主、私の神よ」(ヨハネ二〇・二八)、と告白しない訳にはいかない、このイエス様こそ神様だと示された新鮮な気づきと驚きがあつた。そこからこれまで信じて来た神様を父なる神様と告白するようになった。使徒信条の文言の最も初めは「イエスは主である」だつたそうです。そこから、これまで信じて来た神様との関係で言えば、イエス様はその御子であり、神様は主イエスの父なる神様であられる、と整えられていったのでした。

今日の新約聖書箇所は、初代教会の信仰を言い表した礼拝で唱えられた「キリスト賛歌」と言われている文章です。賛歌と言われているのですから、礼拝で歌われていた讚美歌の歌詞であつたかもしれません。いずれにせよ、キリストを告白し、キリストをほめ歌う賛歌です。キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、

人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだつて、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした(フィリピ二・六)。神様のことを告白しほめたたえる賛歌ですが、真の神様の賛歌というより、やはり中心は何と言つてもキリストの賛歌です。そして最後は「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、という事なしにはキリスト教になりません。洗礼を受けられる時も同じです。今は私たちは、キリストを信じますと、はっきりと告白できる。キリストを信じてこそ、私たちはキリスト教徒です。

ただ、うっかりすると、愛にあふれた素晴らしきお人としてのイエス様、を越えられない。この方が神様ご自身だとまで言い切れないでいる信仰者は、まだまだ多いのかもしれませんが。よく自覚していないと、父なる真の神様を信じることに戻つてしまい、知識としては十分分かつているのだけれども神の御子、イエス・キリストが抜けてしまふことは、いつでも容易にあり得ることです。神の御子キリストへの信仰の曖昧なままのクリスマスはただ楽しいクリスマスになってしまふのでしよう。更に加えて考えるなら、聖霊になる神様への信仰も、知識の上では分かつているけれども、身についた信仰においてはどうか、まだまだ、私たち日本人にとっては課題のままだと思います。

改めて、初代教会が「キリスト賛歌」を生み出したことの信仰の驚き、気づきを私たちも受け取

りたいと思います。神であるお方が人となられた、そこに単なる道徳を越えた真実のへりくだりを見、イエス様が神であられるお方だから、罪の赦しを経験し、神であられる主イエスを心からほめたたえる信仰を与えられています。

イザヤ書が待望した救い主のお姿を思い起こします。見よ、私の僕、私が支える者を。私が選び、喜び迎える者を。彼の上に私の霊は置かれ、彼は国々の裁きを導き出す。彼は叫ばず、呼ばわらず、声を巷に響かせない。傷ついた葦を折ることなく、暗くなつてゆく灯心を消すことなく、裁きを導き出して、確かなものとする（判例を確定して傷ついた葦が折れない社会を形成するということ）。暗くなることも、傷つき果てることもない。この地に裁きを置く時まで。島々（異邦人も）は彼の教えを待ち望む（イザヤ四二・一〜四）。キリスト賛歌のキリストのお姿です。

クリスマス。クリスマスに教会が祝うのは、へりくだつて人となられたキリストのご降誕です。十字架の死に至るまで従順で、神であられるが故に私たちの罪を贖われたキリストのご降誕です。そのため父なる神様が高く上げ、あらゆる名に優る名をお与えになったキリストのご降誕です。教会の私たちをはじめ、天上のもの、地上のもの、地下のものが全てのものが膝をかがめ、全ての舌が「イエス・キリストは主である」と公に宣べて父である神をほめたたえるに至る、キリストのご降誕です。このクリスマスが、旧約聖書が待ち望んだクリスマスであり、初代教会の信仰者たちが

祝ったクリスマスであり、今日、私たちが迎えるクリスマスです。